

「予後，原因，および特定の遺伝子変化と関連した，癌の特徴的組織像」

石川 雄一（癌研究会癌研究所病理部）

岩下 明德（福岡大学筑紫病院病理部）

個々の腫瘍の予後や治療感受性を考慮した上で，適切な治療を行おうとする tailor-made 医療が求められている。病理組織学においても癌をさらに層別化し，予後や原因，さらには特定の遺伝子変化と関連した組織学的特徴を抽出しようという試みが行われてきた。肺癌では，腺癌の中の一群で EGFR 標的薬が奏効することが判明し，また，ALK 融合遺伝子肺癌が見出され，ALK 阻害薬の著効が期待される。これらの癌は，どのような組織学的特徴があるのだろうか。細胞異型の強い乳癌の一型である high-grade solid-tubular carcinoma での特徴的な遺伝子変化は何か。胃癌はこれまで胃型と腸型に分けられてきたが，これらの形態的特徴と遺伝子の変化は関連するのだろうか。大腸癌では microsatellite instability がその発生に関係するといわれるが，組織型との相関はあるのか。

本シンポジウムでは，上記のような例をはじめ，組織像-遺伝子型関係という観点から，腫瘍病理組織学の所見をその予後や原因，さらには治療感受性と関連づける試みを行いたい。